

令和5年度大分県立特別支援学校第三者評価【評価書】

学校名	大分県立別府支援学校石垣原校		
重点項目	評価項目	評価の観点	評価
学校の組織運営	1 校長のリーダーシップ	* 社会のニーズ等を踏まえた学校経営ビジョンの設定 * 学校目標、学校運営計画の適切な設定と教職員の共通理解 * 的確・適切なリーダーシップの発揮、教職員からの信頼	教育目標、課題へのつながりが理解できるグランドデザインを設定している。学校の強みを発揮するビジョンになっており、具体的な取組も謳われている。別府支援3校がつながりながら取り組んでいく意義を言語化されている。
	2 組織的運営・責任体制	* 教育目標、学校運営計画との一致 * 組織的な運営・責任体制の整備、校務分掌の機能 * 幼・小・中・高の一貫性のある指導体制の整備	校長と副校長の意思疎通がしっかり為されており、主幹教諭、学部主事、分掌主任のミドルリーダーが役割を理解している。連絡会シート、申し送りシートを使って小中高で継続した指導を目指している。
	3 服務監督・危機管理体制	* 内規、危機管理マニュアル等の適切な整備 * 事件・事故発生時の迅速で適切な対応 * 法令に則った医療的ケア実施体制の整備	学校内規、危機管理マニュアル等が適切に整備されている。緊急時の対応やハリーコール訓練など、病院との連携、登校生を対象とした訓練が計画的に実施されている。鶴見岳の小噴火想定訓練を実際に病院へ緊急下校する訓練も実施している。
	4 家庭・地域との連携、情報提供	* 幼児児童生徒及び保護者の満足度や要望を把握する取組 * 学校ホームページの活用、学校便りの発行等による情報の伝達・公開の取組	ホームページは学校行事の様子などが写真を用い、わかりやすく掲載されており、必要な内容は発信されている。授業の様子のDVDでの送付など、年間を通して保護者との連携が定期的になされていた。地域住民＝テーマ・コミュニティと考えると、協力要請や活用は為されていると思われる。
	5 センターの機能	* 小・中学校等の要請に応じた巡回相談等への積極的取組 * 特別支援教育のセンターとしての特色ある取組 * 組織的に取り組む校内体制の整備	地域の特別支援教育のセンターとしての校内組織は整備されており、幼稚園を中心に小・中学校の巡回相談も実施されていた。
学習指導	1 授業	* 障がいの状態や特性、発達の段階等に応じた指導 * 一人一人の指導目標・方法の共通理解に基づいた実践 * 学習効果を高めるための外部専門家との連携等の工夫 * 幼児児童生徒の自主的・主体的な学習への取組	児童生徒の個別性に応じて専門性を生かした教育が行われていた。教育課程の検証・改善のプロセスとスケジュールも示されていた。個別指導が中心であるが、新任者などへのサポートもあり、必要性・必然性があって連携がされている。ICTの活用についても外部人材の活用が為されており、支援機器、支援アプリの活用と児童生徒を捉える授業力量が感じられた。
	2 指導、支援のための計画の作成と活用	* チェックリスト等に基づく実態把握の実施 * 本人・保護者のニーズの把握、PDCAサイクルによる指導改善 * 保護者等と連携した教育支援計画の作成、長期的視点の支援	指導計画は整備されており、各教科等を合わせた指導の内容について、教科を手がかりにして整理をされている。動画の視聴による授業研究が行われており、個別の指導計画の内容の客観性を高めている。学校支援会議連携シート、「よりよい生活」シートが作成されており、連携が図られている。
	3 授業研究・授業改善	* 社会のニーズや学校の教育課題等に基づく学校研究への取組 * 計画的な授業研究の実施等による授業改善への取組 * 専門性向上のための積極的取組、専門性の高い授業実践	専門家を活用した授業参観・協議など、授業研究に積極的に取り組んでおり、学部内での協議が効果的に実施されている。「なぜ・何のために」を語り合う合うことで、専門性の向上につながる事が期待される。
職業教育及び進路指導	1 進路指導	* 組織的なキャリア教育（進路指導）への取組 * 本人・保護者の進路希望の把握、きめ細かい進路指導 * 定期的な職場訪問等による状況把握	進路講演会、ワーキングフェアが実施されており、オンライン見学や社会人との交流も行われている。学校支援会議連携シートや「よりよい生活」シートが作成されており、児童・生徒の実態に対応した進路の情報提供は為されている。引き続き情報の提供や本人のニーズに応じた対応が必要である。
	2 就業体験の機会の確保	* 福祉・労働施策や関係機関の事業等の情報収集の取組 * 実習先、就労先等の開拓に関する積極的取組 * 作業学習等の学習の工夫・改善への取組 * 地域や産業界等の協力等による就業体験の充実	別府支援学校本校を含めた3校合同でワーキングフェアを開催し、県内28事業所の参加を頂いている。ベツトサイド、校内での実習、ICTを活用したオンラインでの作業も行われている。
	3 職場開拓	* 地域の企業、福祉・労働の関係機関等との密接な連携 * 教職員・保護者が一丸となった職場開拓	限られた進路となる場合もあり、個別に取り組まれている。
豊かな心・健やかな体の育成	1 社会自立に向けた教育	* 互いの良さを認め合い、豊かな人間関係を形成できる幼児児童生徒を育成 * 卒業後に必要とされる力を踏まえ、各学部段階において適切に指導	遠隔授業や、教員によるマンツーマンの指導がきめ細かく行われていた。卒業後も入院を継続する児童生徒の生活の質を高める教育の創造が望まれる。
	2 生徒指導	* 幼児児童生徒理解のため保護者や関係機関と連携 * 障がいの状態等を共通理解し、組織的な生徒指導の取組	修学旅行や校外での活動に病院の医師が同行するなど、病院との連携は密になされていた。動画視聴による授業研究など、児童生徒理解の客観性を高めるよう努めている。
	3 教育相談	* 専門的な立場のスクールカウンセラー等との連携 * 教育相談等に関する知識習得や技能向上に向けた取組	病院の職員と連携していた。
	4 特別活動	* 学校、地域の実態等に即した学校行事、児童生徒会活動等の取組 * 交流及び共同学習への積極的取組	鶴見校とのオンライン交流や芸術緑丘高等学校とのリモートによる交流会、「ふれあい作品展」の開催などを行っている。
	5 安全管理・医療的ケア	* 教職員間で迅速に情報共有する体制が確立 * 教職員・幼児児童生徒が安全に行動できる取組や環境作り * 校内の医療的ケア実施体制が整備	学校看護職員の健康観察と教員との連携、病院との連携など、細やかにされており、児童生徒の健康観察も十分に行われ、緊急時の体制整備ができていた。医療的ケアの実施体制については、綿密にマニュアルが作成されており、適正に実施されている。
全般	障がいの状態や発達の段階等に応じた適切な配慮	* 教育活動全般にわたる、障がいの状態や発達の段階等に応じた適切な配慮	病院と連携して感染予防や緊急時の対応訓練などを行い、安全・安心を基盤として、日々の教育活動を広げようとしている。ヒヤリ・ハットの共有や授業研究で教育実践を語り合うことで、省察による実践の問い直しが行われているが、さらに、生活単元学習の「課題」の段階（身近な課題－社会の課題）からの単元の配列を検討することが望まれる。
総合評価	児童生徒への個別支援では、ICTの活用として、支援機器・支援アプリの使用がされている。子どもの特性や認知に応じた教育が行われており、今後も今までの実績を基本に児童生徒の実態に応じた教育の提供が効果的に継続できる実践を期待する。教育内容・方法の個性が高く病院との連携の必要性・必然性が高いことは、この学校の特徴であり強みでもある。これからの学校教育を考える時に、病院との連携のなかで蓄積された学校運営等の知見から学ぶものがあり、他の学校がローカルコミュニティやテーマコミュニティと共に活動するための貴重な知見として活かしてほしい。		
校長コメント	別府支援学校石垣原校は、病院と併設した県内唯一の病弱特別支援学校である。児童生徒数の減少により小規模ではあるが、医療と教育が連携して子どもの状態や目標を共有し、指導・支援ができる体制を築き一人ひとりの生活の質の向上を図ってきた。近年は重症心身障がい児の割合が増えており、常時医療的ケアを必要とし、刺激に対する意識的な反応が見えにくい子どもも増加しておりその教育的対応が求められている。また、短期入院生のうち、不登校の子どもも多くその対応も課題となっている。これまでの取り組みを継続するのはもちろんだが、新型コロナウイルス出現に見られるように新たな疾患に向き合うことも求められる。病気に対する正しい理解のもと専門校として実践を積み重ね、その成果を発信し病弱虚弱教育の充実や発展に寄与したい。		